

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十六年四月一日發行
昭和二十六年三月廿五日印刷
昭和二十六年四月一日發行

第十七卷 第四號

浄土

四月號

花と西行法師 吉田絃二郎
最後の遊行 大野法道

切なる願ひ 中村康隆
布施行に生きる 藤吉慈海

和と敬

ダレス特使の對日講和に關する先頃の發表は、敗戦七年を苦惱した日本にとつて、大きく新しい一步の前進を約束するものとして注目される。從來の、勝者が敗者に望んだ講和締結と著しく趣きを異にした新しい性格を、そこに見て我々は殊につよく平和への念願を深める。

講和が戦争状態への大きなしめくまりであることに違ひはないが、たゞその視點にだけたつとき、それは後ろ向きの講和である。講和は過去への終止符であるとともに、新しい平和世界への一步の出發點であるという廣い視點から全てが含まれるとき、眞に前向きとなる。我々はその罪迹を顧みて、責任を痛感する。と共により積極的に新しい平和世界の一員たらんとする再生の念願をもつ。

古來、和については聖德太子十七條憲法の第一に掲げられたように早く注目されているが、和は多くの個の存在を前提とする。異るところの個が夫々互に融通する關係が和である。主に對して幾人かの客が一座して、それらの人たちが夫々の個性と人格とを保ちつゝしかも一の空氣にとけこみ、一の世界を圓成するところに、茶道の和が成立する。だから異なる個性、人格の尊重、——敬が茶道にあつては根本の態度として要求される。敬は和に至る道であり、また和から生れ出もする。

民主社會は平和を究竟の原理とする以上、そこには「互敬」の裏打ちがなければならぬ。こう考えたとき、講和を論議し、民主主義を説く前に、先づ我々は自らの日常に於て、果たして「互敬」の精神がふかく生活に根を下しているかを充分反省する必要がある。公共の精神というも畢竟、まづ和と敬との反省から始まる。(藤田)

目次

布施行に生きる	藤吉慈海(10)
月影の	赤尾敏弘(20)
聖句抄	(4)
切なる願ひ	中村康隆(13)
花と西行法師	吉田絃二郎(1)
最後の遊行	大野法道(5)
楽しい淨土	佐藤諦叡(16)
いやな想出	須藤隆仙(18)
五月の佛教放送	(9)
悟りのこゝろ	竹中信常(22)
芝園だより	



花と西行法師

吉田 絃二郎

吉野の下千本の櫻は花のさかりであつた。

わたくしは花矢倉のけわしい坂を登り、水分神社の方へ歩いて行つた。このあたりから、山の景色はまだ冬枯れて、霜柱が立ち梅、ちらほらの風情で、樵夫などの住むわづかの家が見出されるばかりであり、それから奥へは人の住むけしきも見えない。その山徑は行者たちの大峯山に通ふ道になつてをり、樵夫たちの吉野杉を伐つて山を下す路でもあるので、比較的に廣く、滑かであるが、人里をはなれてゐるので寂しい。水分神社から大分奥へ入つたところに小ひさな堂がある。役の行者のお弟子を祀つたところださうである。

そのお堂から本道に別れて、右の小道に入つて少しばかり歩いたところに西行法師の庵の趾がある。吉野を訪ふ人たちも、餘程篤志の人でなければ奥吉野の西行庵を

たづねる人はないと見え、本道から岐れた西行庵までの小徑は冬枯れの草に埋もれて、かへつてあはれに尊く思はれた。西行法師が朝夕にむすび、後世俳人芭蕉が掬んだとくどくの清水は、小徑をだらだらと下つたところに今も苔につゝまれて湧いてゐる。

西行庵は後ろに山を負ひ、前に展けた遠山をながめる景勝の地に在るが、よくも奥ふかく、この寂しい山に世をのがれたものだと思へば、暎の裏が溫くなる思ひがした。

そこで、西行法師とさくらについて考へて見たいと思ふのであるが、西行法師くらゐさくらにあこがれた歌人はなく、西行法師くらゐさくらについてすぐれた歌を數多くのこした歌人もないであらう。

つい、このあひだのことである。若い友人が訪ねて來

て、「今年もすぐさくらが咲くが、今年の春こそゆつくり
氣を入れて花を見ようと思つてゐる。今までは、ともす
れば、忙しさに紛れてつい花を見ないで春を過ごしたこ
ともあつた。今年の花は今年見なければ、もう永遠に見
られないのだから」と語つてゐた。昔から誰れも考へた
言葉であるが、その花を見る心がまへはありがたい。

西行法師の花を見る心がまへはこれであつた。

さくらの花は西行法師にとつて直ちに佛さまそのもの
であつた。

かれは花が咲いたとなれば一切を投げすてゝ無心に花
の中に飛び込んで行つた。佛さまとわが身、わが一身と
花は一如であつた。佛さまに抱かれて往生を遂げん思ひ
の西行法師はかくうたつた。

ねがはくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

二月の望月のころといへば花のさかりである、涅槃會
のころでもある。そしてかれはほゞこの歌の通りに建久
元年の二月十六日に七十三歳で、河内の弘川寺で入寂し
てゐる。かれは文字通りにさくらの花に生き、さくらの
花に死んだ人である。

よしの山雲をばかりに尋ね入りて

心にかけし花を見るかな

よしの山梢の花を見し日より

こゝろは身にもそはずなりにき

よしの山谷へたなびく白雲は

嶺のさくらの散るにやあるらん

吉野山一むら見ゆる白くもは

咲おくれたるさくらなるべし

吉野の奥に庵を結んだ西行法師の實感であらう。吉野
の嶺々に揺曳する香雲をながめてしみじみと花に明け花
に暮るゝ春の日を楽しんだであらう西行法師の姿が想ひ
やられる。「心にかけし花を見るかな」とあるのを見れば
永い年月あこがれてゐた吉野の花を、現實に見ることの
できた満足感に浸された西行法師の子供のやうな嬉々た
る風貌も想像される。

いつたい西行といふ人は子供のやうなところを多分に
持つてゐた人であつた。

藤原頼長の「臺記」には西行の出家について「家富年
若、心無欲、遂以遁世、人數三美之也」と書いてある。

家を捨てたのは二十三歳の若さであり、北面の武士とし
て、六尺豊かな偉丈夫であり、代々の名門で、家は富ん
でゐた。後年、文治二年八月十五日六十九歳の西行は鎌

倉で將軍賴朝に逢つてゐる。それも自らすすんで賴朝に謁したわけではない。吾妻鏡には「一品御參詣鶴岡宮。而老僧一人徘徊鳥居邊。惟之以景季令聞其名字給之處、佐藤兵衛尉憲清法師也。今號西行云々」とあり、當日西行は鶴岡八幡の鳥居のあたりを歩いてゐるところを賴朝に見つけられたのである。そこで營中に招かれ賴朝に歌道と弓馬のことをたづねられたことが記されてゐるところを見れば、西行在家時代の武名は相當なものであつたことが察せられる。この富にも地位にも才にも恵まれた青春を惜しげもなく捨てゝしまつた西行は無欲であつたばかりでなく、子供のやうな人であつた。といふのはこの對面の席で賴朝は銀の猫を贈つてゐるが「上人乍拜領之、於門外與放遊兒云々」とある通り、これを門外に遊んでゐた童に與へてゐる。これには無欲以上のものが感じられる。いやしくも今は世に時めく將軍家の賜物である。それを門前で捨てるやうにして童にくれてやるといふことは大人の常識を以つてすれば非禮であり、將軍の志に報ゆる途でもなく、ともすれば將軍の怒りに觸れないとも限らない。しかも西行は淡々として銀猫を童に與へてゐる。氣のおもむくまゝに振舞ふところ、まことに天衣無縫、子供のころでなくてはできな

いことである。

この賴朝との對面でもう一つ面白い話は歌に對するかれの心がまへである。「詠哥者、對花月一動感之折節、僅作卅一字一許也、全不知奥旨。」と語つたといはれる。花月に觸れて心腸の動感するがまゝに三十一文字の歌を作るばかりで、歌の奥義といふものを認めないのである。子供の心である。茶人利休が茶道を説いて「茶とは茶を點てゝのむことなり」といひ、さらに俳人芭蕉が俳諧の奥義を問はれて「子供等の成すところを見よ」とさとしたのといかにも相通するところがある。

子供の心で歌をうたつた西行は子供の心で花を見た。

春になるさくらの枝は何となく

花なけれどもむつまじきかな

吉野山梢の花を見し日より

心は身にも添はずなりにき

あくがるゝ心はさても山さくら

散りなむ後や身にかへるべき

木の下の花に今宵はうづもれて

飽かぬ梢を思ひあかさん

身を分けて見ぬ梢なく盡さばや

よろづの山の花のさかりを

花に酔ひ、花に魂を投げ込んで花を見たのが西行法師であつた。かれは子供の心で花を見た。そして子供の心でよろこんだ。

しかし花はあまりに早く散る。かれは子供心で散る花のあはれを感じた。

わび人の涙に似たるさくらかな

風身にしめばまづこぼれつゝ

花も散り涙ももろき春なれや

又やはと思ふ夕暮の空

風もよし花をも散らせいかゞせむ

思ひはつればあらま憂き世ぞ

西行法師にとつては、捨て果てし世にたゞ一つのなくさめは春の花ばかりであつた。かくてかれも六十の坂を越した。

春毎の花にこゝろをなぐさめて

六十あまりの年を経にける

かれは死後のために

佛にはさくらはなを奉れ

わが後の世を人とぶらはゞ

の歌をのこしてゐる。かれは子供のごとく發心し、子供のごとく生涯を佛さまに仕へ、子供の心で花を見、歌

をうたひつゞけた。

花の咲く日だけでも西行法師の心にあやかりたいものである。

聖句抄

言葉だけ美しくて、實行の伴はないのは、色あつて香りのない花のようなものである。

花の香りは風にさからつて流れない。しかし善き人のほまれは、風にさからつて世の中に流れる。

眠られぬ人には夜が長く、疲れたものには道が遠い。正しい教を知らない人は、その迷ひは長い。

教を喜ぶ人は心が澄んで、快く眠ることが出来る。教によつて心が洗われるからである。

信仰は人のよき伴侶、智慧はよき導き手である。悟りの光を求めて苦しみの闇を免れるようにせねばならない。

最後の遊行 (二)

文學博士 大野 法 道

一、七 不退法

人の世を健全に生きる力が、戦争を起そうとする企てをも打碎いた事が、釋尊の事績に傳はつて居ります。釋尊がマカダという國の、王舍城という都の郊外の靈鷲山という所に居られた時に、――阿闍世という國王、此王は若い頃には、釋尊に背中を向けた提婆と一しよになつていました。後には熱心な佛教信者になつた。――其阿闍世王が、ヴツジという處を征伐しようと思ひ立ちました。

しかし、かねて歸依する釋尊に其由を打明けて、肚を定めたいと思ひ、ヴツサカーラという大臣を使い立て、釋尊の教を請うたのであります。ヴツサカーラ大臣は釋尊を訪ずれて、實は國王がヴツジを征伐し、ヴツジ人を破滅に至らしめようという、お考えでありますかと申上げた。

すると釋尊は、うしろに居る阿難に「阿難よ、ヴツジの人は、集まるべき時にはよく集まると、日頃聞いているか」と問われました。此集まるべき時によく集るといふのは、民主的に人々の意見を尊重して聞くための集會が催された時、よく人々が集まるということでもあります。すると阿難は、「そのように聞いて居ります」と答えると、釋尊「かれらが集まるべき時によく集まる限り、ヴツジは榮えて、衰えたり亡びたりすることはないのである。又阿難よ、かれらは足並そろえて、すべきことに精出すと聞いているか」と訊かれるので「そのように聞いて居ります」といふと、「然らば阿難よ、足並そろえて、すべきことに精出だす限り、ヴツジは榮えて、衰えも亡びもしないのである。又かれらは定めるべからざることを定めず、定めた事を破らず定めた通りに實行すると聞いているか」ときかれる。「その

通り聞いております」といふと、「然らば阿難よ、定めるべからざるを定めず、定めた事を破らず、定めた通りに實行する限り、ヴツジは衰えも亡びもしないであらう」と言はれました。このやうにして「ヴツジの人達が古老を敬い、古老の言に耳を傾けるべきだとして居る限り、大丈夫である。又かれらの中の男が、女や小供を暴力で連れ出すことのない限り、大丈夫である。又かれらが正しく祖先を思う限り大丈夫である。又かれらが、修行者を正當に保護して他國から來た修行者たちは、ヴツジで安心して居れる限り、大丈夫である」と言われたのであります。

之を聞いたヴツサカーラ大臣は、この内のどれ一つも、國の力の要素であるのに、七つが全部揃つてゐるというのでは、逆もヴツジを征伐するなどは、思いもよらぬことである。早く歸つて國王に此事を申上げねばならぬと、大急ぎで歸つていきました。

此七つの事は、人間として本來そうなければならぬ事柄で、いずれもおのずからなる自然の法を灯として、自分が生きる姿であります。國も人も、釋尊が言われるやうに之によつて榮えこそすれ、衰えることの無い、亡びることのない、確かな道であると思ひます。之は七つありますから七不退法と言われて居りますが、つまめれば、人々が心を合せて和衷協同し、敬うものを持つて居り、正しく働く力は強いという事だと思ひます。更に縮めれば、つまり健

やかに生きる確かさをいうたものであります。

二、人々と俱に

釋尊は、どこまでも人々と俱にある喜びの心で、一パイであつたことについて、こういう事績があります。

一人の弟子がりましたが、眼病に罹つて、とう／＼盲らになつてしまいました。が或る時、袈裟の綻びを縫おうと思つて、針に絲を通そうとしました。見えぬ眼のかなしさ、平生は勘で以てウマク通つたものが、其日はどうした調子か、何としても通らない。そこで彼は、誰かに通して貰わうと思つて、朋輩を呼んでみた。所が生憎誰も居ないのか、一向に返事がない。そこで續けさまに呼んでゐる其聲を聞きつけられた釋尊。靜かに彼の側へやつて來られて、「私が通してあげよう」と言われるのを、聞いた彼は驚いて、「此様な雜事を世尊にして頂くことはできません。あらゆる功德を成し遂げて、遠く人間から離れた高い位置に居たまうみ佛を、煩らわすとは勿體なくて出来ませぬ」と御辭退しました。釋尊は弟子の其言葉を遮りながら、「澤山の功德を積みあげて、そこにじつと坐つてゐるのが佛ではない。人の爲めになる事なら、何時でも、どこでも、どんな事でも、それをどこまでも、して行くものこそ佛である。」と極く氣輕るに、絲を通してやられました。

人間には、尊ぶものを自分から離して、高い所に置きた

がる癖がありますが、釋尊自身は、どこまでも人々と俱にある心でありました。又此じつとして居らずに、どこまでも功德を積んでいくという所には「すべては之からだ」という、不斷に新たなる出發を感じる、望みに満ちた態度があるのではないでしようか。

それから入滅に近づいて、畏舍離の大林精舎に居られる時、其附近にいる弟子達を講堂に呼び集められて、「自分は三月先きには入滅することゝなろう」と申されて、弟子達の一層の精進努力を期待されました。亡くなる前から既に其時期を豫知して居られたようであります。それから釋尊は波婆ベバという所へ行かれました。そこにチユンダという鍛冶屋をやつて居る人があつて、釋尊の説法を聞いていたく感激し、翌日、釋尊や弟子達に御供養の食事を、自宅で差上げることになりました。そこで前の晩からかゝつて、料理をこしらえました。特別に釋尊には、迎も珍らしといわれる梅檀の菌の御馳走を、差上げることにしたのであります。豫定通り翌日、一同はその供養を受けましたが、チユンダの家を辭して歸る途中、釋尊は腹がひどく痛み出したので、休み／＼歩いて、クシナーラという町の郊外へ行かれました。そこにはナイランジャラーという流れがあり沙羅という木の林があつて、其林の中に衣を四つ折にしいて静養のための場所とし、そこへ釋尊は、頭を北にして横になられました。そこで涅槃に入るのである」と決心さ

れました。クシナーラの町には末羅マハラという種族の人達が居て、以前から佛教を信じていましたので、之を聞いて、看病のために必要な物を持つて來てお世話をし、一同悲痛の心に沈んで居りました。

三、八 正 道

そこへ、一人の修行者が走り込んできました。それはクシナーラに住む修跋陀シュバダという老人で、なか／＼教養のある人で、前々から釋尊の事を聞いていて一度逢いたいと思ひながら果さずにいたところ、こゝで重い病に罹られたと聞いて、ぜひとも御存命中に教を受けて、多年の疑問を解決したいと駆けつけたのであります。そして其由を阿難に告げて、釋尊に面會させて欲しいと申入れました。阿難は、此取込みの非常の場合、迎も御引合せはできぬと斷りましたが、須跋陀は、之で釋尊が入滅されたら、悔を百年に残すからと、しつこく懇請する。阿難は強く斷る。その押問答の交錯するのを聞かれた釋尊、「かまわない、其人をこゝへ」とのこと、須跋陀は釋尊に近づいて言うようには、「現に印度には大體六師の教えがあつて種々の道を説き何れも自分の言う所を眞實としているが、どれが果して眞實であるかを見分けるには、どうしたら宜しいか」と尋ねたのであります。それに對して釋尊は八正道という事を説かれました。

八正道というのは、八つの正しい道ということで、簡単に申しますと、一つ正見。正しく見るであります。ハッキリ、シツカリ、人生を見る。見そこなつたり、白眼視したり、斜めに見たりしないこと、眼を開けば見えるものを、わざと眼を閉じて見ようとしなかつたり、初めから色眼鏡をかけたりせず、人生を正視することあります。之を最初に出すのは、之がすべての本だからであります。

第二は正思、正しく思ふであります。考へが變な方角に向つて行かないように、順當に考えること、第三は正語、正しい言葉であります。思つてゐる通りに其まゝ言葉に出すこと言葉に衣を着せるために、とんでもない喰いちがい起きて、事が圓滑に運ぬような例は、いくらでも世間にあるのであります。第四は正業、正しいわざであります。とんでもない事、人様の迷惑になるような事をしないこと。第五は正命、正しい命と書きますが、之は正しい職業ということであります。モグリの、人に話も出来ないような事で、一生を過ごすのは勿體ないことあります。第六は正精進、能率を上げるように努め勵むこと、第七は正念、正しい心の置き所であります。心の置き所が變な所へヅレて居ると、萬事が狂うことになります。

第八は正慧。正しい智慧であります。が智慧と言うてもむつかしいことを理解するということなのとは違ふ。物事を間違わぬように見抜くことあります。數えてみれば此

様に八つありますけれども、要するに、確實な根據ある實生活に含まれるものと思ひます。

今、須跋陀が、それが果して眞實の教えであるかを見分ける方法を尋ねたのに對して、釋尊が此八正道を説かれたのは、結局、根據ある日常の實際生活をしてゐるか居ないかで、きめればよいという事になると思ひます。須跋陀はそれを聞いて、よく納得が出来て、其場で釋尊の弟子となりました。

此須跋陀が教化を受けた事績を眺めますと、彼は始めて聞いた八正道の説法に感じたには違ひありませんが、それよりも、重い病の床に臥しながら、因縁あつてやつて來た求道者を心安く迎えて、最後の日まで、熾んに自己を燃やされる釋尊の、確かな根據ある實生活に、魂が溶け込んだに違ひないと思うのであります。

四、滅びぬもの

釋尊は、いよく入滅が近づいて、なつかしい釋尊に別れる悲み遣る方なく「愁いに沈む弟子達に向はれ、かねて屢言う通り、諸行は無常である。萬物は止めどなく移り變る。こゝに私は入滅する。がたとえ私は逝いても、そなた達人々が、よく放逸に陥ることなく、戒さえ失ふことがなかつたら、如來は滅することはないであらう」と、靜かに諭されて、クシナーラ郊外のナイランジャラーの流れのほ

とり、沙羅^{サーラ}の林が、十五夜の月影に淡く照らされるしゝまの中に、いと安らかに、寂滅の世界に入つて行かれました。

大勢の弟子の中の長老であつた大迦葉は、以前から他國へ行つていましたが、クシナーラで重い病氣にかゝられたと聞いて、急いで歸る途中、もはや師主は此世を去られたと知つて、悲歎にくれつゝ、漸くその場所へ來た時は既に入滅後七日であつたということで、それから前に申しました末羅族の人達が棺をかつぎ、クシナーラの郊外で荼毘^{火葬}（火葬）して、遺骨の舍利は末羅族の人達が祠つて供養をして居りました。所が、其事を聞いたマカダ國の阿闍世王が發起人となつて、釋尊に因縁ある八ヶ國の國王が佛舍利を分けて貰い、それ〴〵舍利塔を建て、御供養をすることゝなりました。

このようにして、釋尊のご一生涯は終りました。八十歳という長壽を保つて、人を益する勤めを、最後の夕べまで続けぬかれたのでありました。がそれは大きい宗教體驗がもたらす、自然の姿であつたと思います。其體驗の心は既に申しました釋尊の、最後の言葉の中に偲ぶことができると思います。それは「たとえ私は逝いても、そなた達人々が、よく放逸に陥ることなく、戒さえ失うことがなかつたら、如來は滅することはないであろう」と傳えられるもので、こゝに放逸とはズルケ心とゴマカシのことでありま

す、それを避けて戒をもつ、戒とは、つまり疎そかならざる心で日日を暮すことで、そこに如來は滅しないであろうとあります。之は結局、止めどなく移り變る人の世に、不滅の望みをかけられたのであります。悠久なる人類の営みの中に、自己を没し去られたのであります。かくて釋尊の行かれた所は、とても大きな、廣々とした世界であるに違いないと思うのであります。（おわり）（二月十四日放送）

五月のNHK佛教の時間

（毎週月水金 六時四五分より
七時迄）

二日・四日

佛像の話

東大教授 矢崎美盛

七日（BK）

佛教座談會

九日・十一日

新佛教講話

東大教授

十四日・十六日

大乘佛教の話

結城令聞

十八日

廿一日

佛教問答

東本願寺宗務總長

廿三日

中外日報社長

廿五日・廿八日

佛教徒の聲

曉鳥 敏

三十日

佛教人生案内

眞溪淚骨

布施行に生きる

——颯田本眞尼——

藤吉慈海

颯田本眞老尼、八十年の生涯は、旅から旅への、そしてかぎりなき布施行の、尊いお姿であつたが、その間にもいろいろの逸話が残れている。

ある旅先での話である。

一夜の宿を乞ひたいと思ひ、つかれた姿である宿屋の前に立たれたが、このみすばらしい尼僧を見ては、宿屋の主人も、あいにく部屋が空いていませんので、といつてすげなくことわつてしまつた。

田舎のこととて、他に宿屋も見當らず、お弟子方も困りはてゝいると、老尼は、

今夜は、宿がないので幸ひ、お通夜が出来る。如來さまが、ここにいらつしやると思つて、みんなで心から三尊禮をあげて夜を明かそう、

と、いつて大きな聲で、おつとめをはじめられた。すると、宿屋の主人があとから追つかけて来て、

大變ありがたいお經の聲が聞えて來ましたが、先刻の尼僧さま方

だと分りましたので、追つかけて來ました。先刻は、お部屋がなくておことわり申しましたが、何とかいたしますから、どうぞ引き返してお泊り下さい。

と、心から申されるので、老尼もそれは有難いと言つて、その夜はその宿に泊られた。そして宿の方たちとありがたい法談の一時を、もたれたのでした。

x

道普請の工夫たちに、お前さん達のおかげで、樂に道が通れる。ありがたいことです。すまぬことです。私は乞食坊主で、何ひとつあげるものもないので氣の毒だが、と言ひながら、袖に手を入れては五錢、十錢のお金を一人一人に渡し、どうか受取つて下さい。とお念佛を申し申して、渡して行かれるのであつた。それで、工夫達も、變つた尼さんだと思ひながらも、ありがたうございますと、お禮を言つて見送るのでした。

漂々として衣の袖をひるがえし乍ら、重い袋を背負つて道をいそ

ぐ老尼の姿、こうした人々によつて、この國の國土が本當の意味で莊嚴せられたのではあるまいか。

お師匠さま、そんなに識りもせぬ人に、一々おじぎをされては、こちらが恥かしくて、こまります。

と、お弟子たちが言う。

何を言う、毎日忙しくて、御本堂に出て、お禮拜することも出来ぬから、こうして道で出逢つた方におじぎをすると、阿彌陀さまに一遍禮拜したと同じ功德があるのだぞ、と、教えられるのでした。

道で行きかう人ごとに、南無阿彌陀佛と、一聲お念佛せよ。そしてどうか、この人も、お浄土への道連れとなつて下さるようにと心から祈念せよ。この世で結縁しておかないと後で濟度しようと思つても、御縁がないことになつてしまふから、

と、心から申されるのであつた。

また老尼は道ゆく時には、常に、寶丹、六神丸などの藥をもつておられた。そして頭痛、腹痛に苦しむ人に逢えば、そのお藥を施された。こうした老尼の徳行によつて、困つた人たちがその病苦からどれだけ救われたか、知れない。「有縁衆生蒙光觸」と言うが、老尼の行かれるところ、みなその慈愛の光と教化を蒙らぬものはなかつた。

×

本眞老尼の布施の行脚は、明治廿四年の濃美の大地震から、大正十三年の神奈川縣藤澤町の震災救恤まで、三十四年間、全く菩薩の

悲願行としてつづけられた。その足跡は、全國二十三縣百五十餘ヶ町村にわたり、施物を施した戸数が六萬戸、勸化結縁された家が十萬餘に及んだということである。

大正十二年の春二度の大火に襲われた島根縣簸川郡佐香村大字坂浦へ、老尼が施行の旅をせられたのは、同年の八月であつたが、當時の追憶を、綿織恭道氏は次のように述べていられる。

實は出雲地方では、尼さんと言えば、何か病身者か不具者かのよう思ふ習慣があり、最初はまだ荷物（配布の品）も到着しておらず、單身見舞を述べてお廻りになるのを、何だか、妙な奴が來た、と却つて皆からウルサがられて、その晩はとうとう焼け残りの或る納屋の中で、マルで乞食か何かのように、わらを褥に一夜をお過しなされた。それでも本眞尼は不平ひとつおつしやるでなく、お念佛を唱えながら一夜をお明かしになつた。そして翌日役場の人がやつて來られて、それが三河からわざわざお越しになつた本眞尼であることが分り、やがてお見舞の品が山と積まれ、それが一々本眞尼の手によつて罹災者の手に洩れなく贈與されるに及んで、浦の人たちはマルで夢のよう、實は何という無禮な勿體ないことをしたとか、かゝる尊い御出家というよりは、むしろこれこそ生きたお地藏さまとも申すべきお方をと、手を合せ涙をこぼして本眞尼を拜んだということであります。

同氏が、本眞尼の寂後、親しくその剃髮された尼寺、三河横須賀の眞珠庵を訪ねられての感想に、はるか幾百里外の人からまでも、ありがたく拜まれる人があるの

に反對に自分の肉親の者からさえ、ありがたく思つて貰えないものもある。その筈だ。本眞尼はすべてのものを拜み、すべてのものを愛されたのだから。私たちは自分の肉親さえ本當に愛することが出来ていないのだ。本眞尼こそは本當にすべての人間を、すべてのものを拜みなすつた方だ。それでこそ、また眞にすべての者から、拜まれなさるのだ、本眞尼こそは眞に、佛におはします。

とあるが、この感想文に對して、三十餘年來老尼の始終がわらぬ志操と行實とを知悉しておられる矢吹慶輝博士も、心からの共鳴を感じたと述べておられる。

x

佛教に於ては、三輪體空といつて、施す者と、施しを受ける者と施しの品物と、この三つが、こたわりなくなされるとき、その布施行は、立派なものとなると説かれている。我々は、よし施をするにしても、いろいろのことに執われがちである。昔の聖者が、雜毒の善、虚假の行と、深く反省せられた通りである。

然るに本眞老尼の布施行に於ては、たとえ、施しを受けるものが空ならずとも、施す者の空を以て、施物と受施者とを自ら空ならしめ淨化せしめうる程の、深い悲願よりなされたものであつた。

西歐の小説の中に、僅か一錢のお金を持つて、これを誰に施したら、神のみ旨にかなふかと思つて、終日街を歩いたが、施を受けるに値する人がなくて、空しく持ち歸つたという話があるが、本當に施者も、受施者も、施物も、空に住して、無執清淨の施を行ずることとは、仲々困難である。單なる財施や、罹災者の救恤なら、慈善事

業家の普通になし得るところである。しかし私たちは、老尼の施行が、單なる慈善事業家のそれではなくして、施を通じて、お淨土への同朋同行を一人でも多く、結縁したいとの悲願を以てなされた宗教的な、やむにやまれぬ行爲であつたことを忘れてはならない。無量壽經に「惠むに眞實の利を以てす」と説かれているが、老尼の布施行もまた、眞實の利に裏づけられてなされたところに、その尊い宗教的性格があるのではなからうか。

布施行者 颯田本眞尼

人々の記憶に尙ほ生きている明治大正期に布施行の體現者ともて生涯を送られた颯田本眞尼の徳行は、老尼有縁の人たちの間にふかい敬慕の念を以て伝えられてはいるが、その詳細をひろく後に伝えるための傳記が未だ現われていないのが惜しまれていた。老尼に歸依されていた矢吹慶輝博士には早くこの企てがあり資料の採録も進み、一部は小冊子の形で活字になつたが全貌を描くに到らずして亡くなられ、大島徹水僧正にこのことが託されたという経緯がある。

藤吉慈海氏は僧正の委嘱を受けて、老尼舊縁の地、有縁の人々を訪ね、辛苦の末殆どその全貌を盡す底の稿を先年完成され今度、石橋誠道僧正、久松眞一氏の序を附して本文一六〇頁の落ちついた装釘で世に送られるに到つたことは、眞に善びにたえない。一讀老尼の行實に接する想ひの中に心をうたれるものがある。「淨土」は今回、著者の特別の御好意で、同書中の一部を轉載させて頂いたが、之は少しでも、本眞尼のふかくたゝえた慈悲心のお導きを多くのの人々と共に得たい心からに他ならない。信仰の書としてこの新著を御紹介いたします。(藤田)

切なる願ひ

——不死信仰の在り方——

中村 康 隆

人の死の縁は、かねて思ふにもかなひ候はず。にわかに大路にて終ることも候。また大小便利のところに死ぬる人も候。

浄土宗の祖、法然上人は、或る人への消息の中で、かように述べられている。まことに、人の死の縁は無量であつて、どのような思ひもよらぬ轉機を持つかは分らない。お祝いの餅が喉につかえて死ぬ子もあれば、進行中の列車からふり落されて惨死する若者もある。「人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり」との御言葉は決して誇張ではない。而も死の事實を究極に於て、何人もこれを避けることが出来ないのである。富貴も位階も呪法も、何物もこれをさえぎり、これに代えることを得ない。豐太閤の如き波瀾萬丈の生涯を送つた人も、その一生の遂に「夢のまた夢」であつたことを嘆いている。過ぎ去つてみれば、千夜も一夜の想出でしかない。「たとひ七八十の齡を期すとも、おもへば夢のごとし」と、法然上人は十二箇條問答でさとされている。上人が遠く教の師と仰がれた唐の善

導和尚も、無常老病の遂に避けがたいことを歎いて、次のようにうたつていられる。

漸々に鶏皮鶴髮、看々に行步蹢躅たり。たとひ金玉、堂に滿つるも、豈に衰殘老病を免れんや。さもあらばあれ、千般の快樂、無常つひにこれ到來せん。唯だ徑路の修行あり。但だ阿彌陀佛を念ぜよ。と。

「たとひ百年なるも、瞬間のごとし」とは五會法事讃の中での法照禪師の嘆きでもあつた。

このようにして、浄土の祖師たちが、阿彌陀佛と阿彌陀佛浄土への信仰を打ち立てるに至つた眞實の基底が、人生の無常性への諦觀にあつたことは、疑えぬところである。人間は、究極に於いて死なねばならぬし、而もそれはいつ自己に見舞つてくるか分らない。いわば私達は常に死の淵に臨んでおり、常に死の不安にとりまかれている。たゞ人は多くはそれを自らの問題としてそれに直面する勇氣を欠いているに過ぎない。彼はそれからつとめて目をそむける。否、彼はそれに背を向け、目を覆うてさえいる。それなのに、それ

なのに尙ほ死の不安は彼の意識の裡に暗い影を時折に投げかけずにはおかない。そして此の暗い影に心を脅かされる人は、屢々悦樂に走り慰戯に狂じる。而も尙ほ飽き足りぬ想に動かさるゝ時遂に宗教の門をたゞくのである。

かようにして、人々を宗教に導く第一の動因が、死にたくない、どこまでも生きたい、との切なる想いに根差していることを知る。凡そあらゆる生の欲求の中で、此の欲求程切なる願はない。それは生命の根本を脅かすものへの魂の底なる叫びである。他のあらゆる生の欲求——食欲や性欲や權勢欲の如き三大本能すらも、これに比べると、寧ろ派生的である。此の生命の根本の願、そこに宗教の第一歩がある。

アメリカ・インディアンンのペプロ族の宗教は、集團的儀禮的であることが特徴的であるが、その宗教の第一眼目は、「生きるように、死なないように、生き長らえて老翁老嫗となることが出来るように」ということだとされる。お前百までわしや九十九まで、とは單に戀の合言葉ではないのである。同じアメリカの主觀的個人主義的であることが傳統であるウインネバゴ族の宗教的目的も、成功・幸福及び長壽を外にしてはなく、此の願望の保護を獲んがために、彼等は淋しい場所に赴いて専念し幻覺經驗を通じて自己の守護靈を獲得せんとつとめるという。

肉體的生命の存續と繁榮とが、死にたくない生き續けたいとの生の根本的欲求に根差して、人間の直截な宗教的願望となるのは、寧ろ當然なのであらう。そこからして桃仙境とか八百比丘尼とかとい

つた不老長壽の神仙説話も生み出されてくる。

しかるに、どのように長壽を祈らうと、究極に於て、死の遂に避け得ない事實に直面せざるを得ないのである。生きんとする欲求に動かされ、激しく自らの生に執着して、より良き生を希求しつつ、生存のあがきを續ける人間にとつて、死は千古の謎を秘めたまゝ、遂に避けがたい運命として、その行手に立ちはだかつていたのである。己れも己れの愛する者たちも等しく死と共に永恒に消滅するということとは、如何にしても肯い得ぬ堪え難い悲痛事たるであらう。そこからして、人は更に尙ほ死を越えての生の存續を翹望し、不死信仰の様々な形態——復活と靈魂の不死と死後世界の存在との如き——を描き出すに至るのである。死にたくない、生き續けたい、という願望から轉じて、死んでも生命のあるようにと希うようになる。

不死信仰の第一の現われは、肉體の復活である。ミイラの作成と保存も、ひとえに復活の信仰と結びついている。更にアタビズムといわれる俗信もそうである。祖父の佛を孫の上に見出す、此の遺傳的現象が、人々に祖父の甦りを想像せしめる。子供に祖父の名をつける習俗さえ、そこから行われるようになる。輪廻とか轉生の信仰も、またこゝから發展する。

不死信仰の第二の形態は靈魂觀念である。生命觀的宗學説を主張した英國のクローレイは、その「靈魂の觀念」なる著述の中で、靈魂の不死信仰の源泉は死者の情愛や人格に關する生存者の記憶の長さの中に存する、と言つてゐる。實際、人は死し肉體は腐敗する。

しかしながら、人の情感の中に憶出は強く生きている。時には幻に見え、夢に現われる。時には心の奥底で語り手となり聞き手となる。靈魂信仰を以て宗教の根幹と主張する英吉利の人類學者タイラーは、夢や幻覺が此の信仰を生み出したとさえ言っている。これを以て、宗教の根源を夢や幻覺の如き不確實なものの中に求めていると批難することは、少しく的を外れている。生と死との根源的事實から生ずる人間の情感の中に、脈々とした不死への確信が湧き出してくるのである。

兎に角、死の事實と死者に對する人間の強い情感死を越えて生きんことを願う飽くなき生の欲求、それが死者の靈魂不滅の信仰ともなるのである。従つて靈魂觀念の最初の形態が死者その者に對する祭祀にあつたことは當然であらう。生者は死んだ。しかし彼は消滅したのではない。彼は單に死者となつたに過ぎない。死者として彼は尙ほ存續するのである。所謂靈魂の觀念が最初死者祭祀にあつたことには確證がある。靈魂を示す呼名は最初には故人それ自體、即ち亡者を指すものであつた。南米ゾール族のアマトンゴは故人の意味であり、ボルネオのダイヤク族のアンツは死せる人そのものを指し、スマトラのバタク族では人が死ぬとトンデイ(靈力が)去つてベグ(死者の靈)となるという。佛典に通常餓鬼と譯されている梵語には、ブレタとビトリとがあるが、その原義は單に死者と父祖とを意味するのである。

所で、死者に對する生者の情感には、死體への恐怖と死者への親縁感とがある。靈魂の觀念にもこれが表われ、その死後の住所に關

する觀念にもそれが表われるのである。

不死信仰の第三の形態は死後の世界の存在である。所謂他界表象と呼ぶる、後生の信仰である。死後の世界の表象も靈魂觀念同様、最初には單に死者の住所を指す觀念であつた。そこから天國や地獄の如き様々なる思念が花咲いたことであつた。そしてその根源は、飽くなき人間の生きんとする願望、切なる願に存したことは疑いないことである。

罪

はじめて罪過を犯した人は、常に自分が罪を犯したことを痛感する。が、何度も同じ罪過をくり返す者は——殊に周圍の人々も同じ罪過の中に在る場合には——その者は惡の誘惑に陥つて、自分の罪を感じなくなつてしまふ。

我々が罪過を犯し、それを自覺した時分には、我々の前に二つの道がひらかれる。第一の道は罪過を認め、何とかしてこれをくり返さないような方法を努めることであり、第二の道は、自己の良心に信頼せず、自分の行つたその罪過を他人が如何にみるかを考へて、若し他人が非難しないなら、これを罪とみとめずに、引き續いてくり返すというのである。「みんながそうなんだ。何で俺だけが、世間の連中と同じことをしてはいけないわけがあるらう。」

そしてこの第二の坂道をえらぶと同時に、我々は善の道からどんなに遠く滑り落ちるか、自分では氣附かないようになってしまふ。



楽しい浄土

山寺の念佛行

佐藤 諦 叡

この寺は、山形縣の草深い山中にあつて、後は月山、葉山を負い、前は最上川を眼下に見下して遠く藏王山を望む風景絶勝の地にある。

當村は、草履作りが盛んで、老も若きも、男も女も、

朝から晩遅くまで、一生懸命草履作り道具の側で精根をこめている爲に、特別の事情でもなければ一寸の休む暇がないので、この寺では時々村内の人々を集めて、慰安の念佛行をするが、中でも有名な念佛行は、毎月一回（十七日）の観音講である。全講員を十二組に分けて、一年に一回づゝの當番制を設けて、全般の世話をしてもらふことにしている。當番の人々は、各自、重箱に一品づつ季節々々の料理を作つて、午後一時頃まで、約十人の人々がいそいそと寺に集まつて来る。そのあとを追つて、

前で御念佛をして、身も心も佛様や觀音様と同様になることが出来るのだと、心をふくらませて、山の陰、或は山の上、森の中からと、にこにこ顔でぞくぞくと集まつて来る、その數は百十餘名。

まず本堂に上つて念佛を稱えながら阿彌陀様と觀音様に御詣りしてから火鉢を圍んで、十四五人づゝ圓を作りそして四方山の話にうつる。午後一時半になると、住職は、觀音様の御前で讀經をする。「香偈」より始めるのだが、「般若心經」にうつると、全員大聲で、精神を込めて讀誦する。其の次に最上三十三所觀世音菩薩御詠歌を一同で朗詠する。（當地方は最上川流域の地であるから最上地方と云う。）其の聲、山地、森林に響いて何とも云えぬ有難い調子が村内に流れる。次は、この眞光寺の御詠歌（ふだらくや、月ぞかがやく眞光寺、てらされ罪は、消

三度繰返して朗詠する。次は十句観音經を十邊繰返す。其の熱心なことは感心する外はない。それから御念佛を五百邊同唱、みな俗界を離れ忘我の境にあつて、生きながら淨土參りをした心地である。最後は送佛偈で終る。讀經の後は住職の説教や紙芝居にうつる。其の時にはいつでも、佛様や觀音様が衆生濟度の御苦心と、宗祖上人や代々の上人の布教に御奮闘なさつたこと、我々は人間に生を得て幸である爲に、行常坐臥念佛するのが最も大切であることを説いている。次に御消息文をきかせ、最後は御念佛を五十邊稱えてから御茶の會にうつる。

これより先、當番者は各自の御馳走を、丸い大きな食器に參拜人の數だけ分けて入れるので、各食器には十種位の御馳走が盛られる、昭和二十六年二月に例をとると人蔘の胡麻あい、燒栗、球菜の胡桃あい、薩摩薯の葛掛、薇の豆腐あい、馬鈴薯の天麩羅、牛蒡の煮つけ、山百合の甘煮、すみ大根の煮つけ、芹のおひたし、それを本堂の片隅に敷かれた板の上にならべて準備をしておく、御茶の會の時には、全員板の側に坐る。そこで熱い御茶が出る。それから食べたり、飲んだりしながら「歌の念佛」を歌い出し、それに合せて踊り出す。

「歌と念—佛—この世に—なけりや—胸の蓮華がコリヤいつひらくよチヨエナチヨエナ—南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

「阿彌陀如來さ—ま—船頭で—ござる—淨土詣り—にコリヤ舵を—とるよチヨエナチヨエナ—南無阿彌陀佛々々」

實に朗かで柔和で、凡ての人々の心には、一點の妄念も見受けられない。ほんとうに阿彌陀様や觀音様と同格になつてゐる。これが現世の極樂淨土だ、いつのまにやら太陽が西の山に没してしまつたので、全員宵の明星を拜しながら來月の念佛行を楽しみとして、念佛を稱えつつ、如來様のような心で家に歸るのである。楽しい一日である。(筆者・山形縣西村山郡西里村眞光寺住職)

(こうした現在行われている地方の佛行事をお寄稿下さい。文中「歌の念佛」は本誌十一月號に紹介してあります。編集部)



いやな想出

須藤隆仙

或る日、孫を連れした老婆が寺へ参つて來た。伴の命日だから、お經を上げてくれと云ふのである。不自由な身をわざ／＼寺迄運んで、息子の追善供養をおこたらない此の老婆に私は頭が下る様な思いがした。其れ丈では無い、幼い子供を連れて、寺に参る事が子供への宗教々育となるのだと思ふと、些細な事ながら私は心の底から湧く喜びが、知らず微笑となるのを、おさえ切れなかつた。

佛前に坐つて木魚をたゞいて讀經して居る時も、後でこの老婆と幼い子供が掌を合せて居るのが見える様な氣がして、いつものお勤めよりも一層有難かつた。やがてお念佛に入ると、老婆も一緒にお念佛を唱え始めた。木魚の調子より老婆のお念佛の方が少し遅い様な氣がしたので、私は木魚の調子をゆるめ

た。そして二人のお念佛が同じ調子になるのがうれしかつた。

やがて御回向も終り、私は老婆を茶の間に案内した。

茶の間の窓から眺める港の美しさや、お寺の建物の事等、色々の話が私と老婆との間に交される。子供はチョココンと坐つて、私の顔を黙つて見つめて居た。

そうして居る中に、もう一組のお参りが來た。若い男の人で、これも又老婆が連れて來た子供と同じ位の男の子を連れした人だつた。「今日は随分珍らしい日だなあ」と私は思つた。若い男は、子供を連れたまゝ、まつすぐ本堂へ行つた。

老婆は、別のお参りが來た爲か、急に「それでは失禮致します。」と云つて坐を立つた。別に引留めもしなかつたが、私は心の中で、

もつとゆつくり休んで下されば良いのに、と思つた。

老婆が出て間もなく、子供連れの若い男は本堂から下つて來た。そして其の儘、土間に下りて、歸るつもりだつたらしいが、何やらうろ／＼して居る。何んだか様子が變なので私は土間の所へ出て見た。

「どうかさいましたか。」と聞くと、

「えゝ、この子の靴が換えられて居るのです」と云ふ。

アツ、キツとあの老婆が間違えたのだな、と私は思つた。

「たつた今、お婆さんが子供を連れて出ましたから、きつと、あの方が間違つたのでせう。まだそんなに遠くへは行つてませんか、行つて見て下さい。」

私に云はれて、若い男は走つて老婆の後を追つた。そして間もなく歸つて來た。やつぱりあの老婆が間違えて行つたのである。

所が老婆が連れて來た子供の靴と、若い男が連れて來た子供の靴とでは、大變な差があるのである。

老婆の方の靴は、古びて破損して居た。若い男の方の靴は新らしい高價なものだつた。「間違ふはずはないのですがネ、どうもお寺

に來ても、うつかり出來ませんよ。」

若い男は、苦笑しながら歸つて行つた。

取りのこされた私は、何んとも云えぬ異様な感に打たれた。

本當に間違つたのだろうか。それとも故意に履き換えたのだろうか。もし故意に履き換えたとすれば、あの老婆は、寺に來て窃盜罪を犯した事になるのだが……。

私は絶対にそう思いたくなかつた。なる可く善意に解釋してやりたかつた。

然く、良く前後の事柄を考えて見ると、どうしても、老婆の立場を有利にする事は出來なかつた。たしかに敷台に腰をおろして、老婆の手で子供に靴をはかしたのである。又双方の靴をぬいだ位地には、多少の間隔もあつた。人を疑ふのは罪である。

だが、若い男の「寺に來ても、うつかり出來ませんね」と云ふ言葉を、否定する事も出來なかつた。論語だつたと思ふが「李の木の下で冠を直してはならない。西瓜島の中で靴を直してはならない」と云ふ警句がある。

物淋しい氣持で胸は一ぱいであつた。

大部前の事であるが、法要の時、やはり參詣人の下駄が換えられた事が幾度かあつた。

たつた今私とお念佛を唱えた老婆だつた。

念佛信者に限つて、そんな事はない、と否定はして見たものの、やつぱり事實は事實である。

もうそろ／＼庭の木の芽が、ふくらみかゝつて居る。

『つぎに又難者のいはく、「今來の念佛者、私の義をたてゝ、惡業をおそるゝは彌陀の本願を信ぜざる也。數遍をかさぬるは一念の往生をうたがふ也。行業をいへば、一念十念にたりぬべし、かるがゆへに數遍をつむべからず、惡業をいへば四重五逆なをむまるゆへに、諸惡をはゝかるべからず」といへり。この義またくしかるべからず、釋尊の説法にも見えず。善導の釋にもあらずもしかくのごとく存ぜんものは總じては諸佛の御意にたがふべし。別しては彌陀の本願にかなふべからず。その五逆十惡の衆生の一念十念によりて、かのくにに往生すといふは、これ觀經のあきらかなる文也。たゞし五逆をつくりて十念をとへよ。十惡をおかして一念を申せと、すゝむるにはあらず、それ十重をたもちて十念をとへよ四十八輕をまもりて四十八願をたのむは心ふかくこひねがふところ也。およそいづれの行をもつばらにすとも、心に戒行をたも

ちて浮囊をまもるがごとくにし、身の威儀に油鉢をかたぶけずば、行として成就せずといふ事なく、願として圓滿せずといふ事なし、しかるをわれら或は四重をおかし、あるひは十惡を行ず、かれもおかし、これも行ず。一人として、まことの戒行を具したる者はなし。

諸惡莫作、衆善奉行、は三世諸佛の通戒也善を修するものは善趣の報をえ、惡を行ずる者は惡道の果を感ずといふ。この因果の道理をきけども、きかざるがごとし、はじめて云ふにあたはず。しかれども分にしたがひて惡業をとゞめ、縁にふれて念佛を行じ、往生を期すべし。惡人をすてられずば善人なんぞきらはん、つみを、おそるゝは本願をうたがふと、このこの宗にまたく存ぜざるところ也。』

あれから幾日か立つた今日、私は元祖上人の御法語を讀みながら、あの子供連れの老婆の事が想出されてならない。

厭な厭な思出である。だが然し、せめて「分にしたがつて惡業をとゞめる」位の氣持丈は持ちたいものである。

然も其れは他人の事ではない。自分自身の事なのである。

月の影の

赤尾敏弘

私は今十八九歳の青年をあづかつてゐる。

彼等は若さに満ちてその元氣な聲、澄み切つた眼ざし、豊かな頬、それ等總てが私に純一無上の喜と生き甲斐を與えて呉れ、更に反省と目覺めえの不斷の鞭ともなつて呉れる。

丁度一ヶ月程前私が唯一人宿直室で夜遅く迄仕事をしてゐた時のことである。もうとつくに十時は過ぎてゐた。ガラガラつと戸を開ける者がある。見れば二三日前からどうも様子がおかしいから氣を付けねばなるまいと噂してゐた日である。「今晚は！」ポツンと云つてじつと立つた儘である。「より！どうした」と反射的に答えたものの唯ならぬ氣配が感ぜられる。疊の上にびたりと俯向いて「先生分りません。何故人間は生きねばなんのですか……勉強なんてしたつて……」小さな然も

力のこもつた聲でそうつぶやくとじつと私の眼を見すえて今にも泣き出しそうである。私は思はず魂の中心を觸れられてハツと戸惑ひした。人間の一大事、「生」「死」彼は今思ひつめてゐるのだつた。

私はやつと自分を取り戻すと「人間にとつて一番大事なこと、それは生きるということなんだよ、それは理屈でなしにね……そのためにどれだけ多くの人が努力してゐることか……」暫らく二人の間に沈黙が続いた。「先生それが分らんのです。何故だか分りません」日は頭を抱え込む様にしてじつと身動きもしない「うんそれじゃ話を變えて、君とこうして一しよに生活してゐて今迄に心から嬉しかつたことはなかつたかね。更に人の死や苦しみを見て本當に自分が生きておれてよかつた

とか心から濟まない勿體ないと思つたことはなかつたかね」……「勿論時間的に短かくとも又たつた一度か二度かであつても……」えゝ我を忘れる様なことがあつたことは確かです。然し今は苦しいこと許りです」うん苦しい然しもつともつと苦しい人だつてあるんだよ……矢張りそれに負けちやいけないんじゃないかね」

私は何とかいゝくるめた様な氣に強いてなつて兎に角夜冷えのする道をとぼく／＼と家迄送り返した。歸途私獨り、父、母、彼の顔、いじらしさ、その性、頭の中に去來するのを覺えじつと考え込まざるを得なかつた。

それから三日程経た放課後小使が慌てふためいて「先生！先生！大變ですよ。日はさんが毒藥を、瓶に入つた毒を」私はしまつたと思つて心では慌てふためきながら様子は極めて平靜を粧つて彼の所に行く／＼と未だ呑んではゐないらしい。どきまぎし乍らも、うなだれてやつれ果てた彼からその瓶を奪いとると靜かに「今晚來るんだよ。いゝかね早まつちや駄目だもう少しじつくり考えて考えて考えて抜かう。負けちや駄目だ」そういうと私自身

にも涙の出て来るのをどうしようもなかつた。「いゝね、今晚来るんだよ」もう一度念を押すと彼は漸く承諾の色を浮べて肯いた。

その晩九時十時を過ぎても自宅え来ない。

私はじり／＼し乍ら、矢張り私の方から直接行つた方がよかつたのでなかつたかと後悔したり反省したりして出かけようとする所えコッソツと下駄の音がした。私は思わず立つて戸をあけると私自身が外へ飛び出した。二人黙つて歩き出す。彼も黙つて私も黙つて……外は恍々たる十四日の月が私達を心憎い迄照してゐる。何ものも照さずば止まぬといった清明さ、静かさでもつて、草の一本一本、田の切株の一つ一つを一點の曇りなく照す月、私は思わず且の手をとつて心の中に靜かに合掌し彼の身の苦しみを人間なるが故のもだえを考え共感に心中が交流した。じつと月を見て彼を見る。私には知らずしらず出て来る法然上人の「月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ」の歌があつた。そうだが私は喜に似た自信を以て彼に語つた。

「あの月を見て御覽！　ね、こんな歌があるよ。月影の至らぬ里はなけれども……ね、眺

むる人の心にぞすむ、こういうんだ。月の光は全國、君も僕も照してゐる。貧しい人もお金持の人も、悪人も善人も、みんなみんな一様平等にね。此の良い月を誰が何處でどんな氣持で眺めてゐるだらう。否眺めてゐない人の方が多いかも知れない。然しお月様はそんなことは一向おかまいなしに照してゐらつしやる、之を眺められる君、僕、苦しくて分らない分らないという君もね。……僕達は何れ死ぬだらう。多くの人も死んだ。然しお月様は相變らず照してゐらつしやる。此の變らぬ光を浴びようじやないか。思いきり嬉しく清く眺められる様な自分にならうじやないか。眺める人の心にぞすむだよ。死んでしまつたら此の良いお月さんの光が私達に泌み込むだらうか、眺められるだらうか。……

彼は大きく肯いた。じつと眺めてゐる。長い間まんじりともせず眺めてゐた。やがて、「先生分り出しました……」彼は月光に照されてポトリと涙を落した。私は共に人間の生の尊さを思い恍惚の中に月に合掌した。

私はふと立止まつて田の畦から落ちる水の音に耳を傾け我知らずその水音に聞き惚れて

ゐた。ちよろ／＼落ちる水の音、きら／＼光る水、何ものよりも清く若い且の魂に食い込む音、「ね！　此の水音が聞えるね、此の音が聞えるかね、何て嚴肅なことだらうね。死んだ人に果して聞けるだらうか、私達生きてゐる者にのみ聞ける音じやなからうか。生命ある者にのみ……」ねえ、人間は苦しいよ、君の様に眞剣に考えれば考える程苦しいよ、お互に苦しい、そういう時にはこの歌を思い出さう、そしてそつと手を合すんだよ。念佛すれば罪も苦しみもやがては消えると云われてゐるよ、苦しい時はお念佛しよう。悲しい時は月の光を思い水の音に耳を傾けお互に手を握りあつて行こうよね。

彼はニッコリ笑うと私の手を上から抑え心に交流する暖いものを感じたのか私が送つてゆこうというのを遠慮し遠慮しつゝ家路へついた。私は一人田んぼ道を歩み乍ら月の光を一ぱいに浴びてお念佛を續けてゐた。

一週間程経つてグラウンドにボールを追うて脱兎の如く驅けてゐる且の姿が見られた。私は思わずニッコリ笑うと又小さくお念佛を口誦んでゐた。(兵庫縣篠山農業高校教諭)

悟りのころ

竹 中 信 常

世間では悟りとは迷いの反対であるといっている。だが私は前回に迷いのところについて話したが、その節、悟りは迷いを経て始めて得られるものだといった。悟りは迷いの反対ではなく、むしろ迷いを基として出て来るものなのである。私共の日常生活の中でも、このことは屢々経験される。何かの問題の解決に熱中して、一生懸命に考えてみる。ところが仲々によい智恵も出て来ず、遂には全く行きつまつてしまう。どう考えてみても分らない。仕方なく諦らめて何か外のことをする。しばらくして、ふと又もとの問題を思い出してやつてみると、なーんだと思う程すらすらと片附いてしまう。考えることは迷うことである。別のことをして気分を改めて再びやつてみると分る。こんなことはよくある。また學者が深遠な原理や法則を発見したり、藝術家が偉大な作品のヒントを得るのもこんな風にして得る場合が多い。釋尊が十二月八日の明けの明星の輝きを見て忽然と悟りを開かれたのも、矢張り、それに先立つ數年間の刻苦修業即ち迷いのところがあつたが故に、かすかな星の光りにも偉大なる悟りのいとぐちを見出されたものである。

このように、私共の日常の體驗から始まつて、佛陀釋尊の悟りに至るまで、その内容の廣い狭いはとに角として、或る一瞬を翻して忽然と新しい世界の開けて来る。その心持ちそのものには異りが無い。これが悟りのころなのである。ところが私共の場合には、時にはチラツとそのような心がひらめいても、瞬時にして消え失せてしまつて、長くこれを止めておくことは出来ぬ。それは、私共をとり圍む現實の社會の餘りにも災わしいのと、その災わしさに心がとりまぎれてしまふからである。どうしても、私共の心は現實の、雜多にして騒がしい世相にこだわつてそれから離れることが出来にくい。それ故に、折角、瞬間的に得た悟りのころも直ちに世相の波の中に見失なつてしまわなければならないのである。

私共にも悟りのころはこのようにあるのである。ただそれをはつきりと自覺する機會と場所が得にくい丈けである。それ故に、古來、悟りを開き、道に徹した名僧知識は、いづれも坐禪・冥想・三昧に耽つたのである。身と心とを寂靜の境地に置いて、外界の凡ゆる刺戟を斷つて、自己の心を見つめたのである。そこに悟りが開か

れたのである。悟りに至る道、これは幾多の人々によつて、數千年の長きにわたつて教えられ、八萬四千の法門として示めされて來た。今更私などがここで再びこのことについていうのも益なきことである。私は、むしろ、悟りそのもの、即ち悟りのところ持ちとは一體どのようなものであるか、ということをお話したい。

非常に深い山の中、邊りは森閑として物音一つ聞えぬ。その静けさに包まれてちつと空をみる。ふと、一羽の鳥が、東の空から西の方へ、ゆつくりと大空を横切つて飛んで行く。その様を見て私共は何と感ずるであらうか。假に一人の詩人がこれを見ていたとしたら彼はその静けさの中に動く一羽の鳥を詩として眺めたであらう。畫家が見たならば、早くもその姿を繪筆に捕えて畫面に寫すであらう。更に獵師であつたなら、早速に銃をかまえてこれを射落そうとしたであらう。ただ一羽の飛ぶ鳥も、これを見る人によつて、色々に變化する。詩としての鳥、繪としての鳥、獵物としての鳥。然し鳥は悠々と西の空へ消えて行く。地上に於ける人間の様々の狭い量見とは何の拘わりもなく飛んで行く。この時、山の一角に、深い瞑想に耽つていた修行者がいて、彼がこれを眺めたとしたらどうであらう。動くもの一つなく森閑と静もり反えつた中を一羽の鳥がその羽根をゆつくりとはたきつゝ飛ぶ。正しく靜中動の姿であり、太陽の輝きの下に、はるか山の峰を背景に空の一點として浮ぶ鳥の姿は詩でもなく繪でもなく、いわんや單なる獵物でもない。まことにそれは、その中に大宇宙のすべてを含んだ一切のものなのである。詩人の心も、畫家の心も、獵師の心も、その他これを見る凡ゆる人の

心の一切を容れてなお餘りあるものである。これを眞理という。そして鳥の姿をそのように觀ずる修行者の心を悟りのところというのである。鳥が一切を含むとは、これを見る修行者の心が凡ゆる人の心を含んでゐるからである。宇宙一切であるとするのはその心が宇宙一切だからである。單なる詩人だとか獵師だとかいつた小さい個々の立場を離れて、何等現實の自分にこだわることなく、本來の心そのものになつて見るからである。佛教ではこのような心の境地を無心とか無我とか三昧とかといつてゐる。または虚心とか放心とかともいう。心即ち日常の意識がなく、我がない。それ故にそのものを在りのままにみることが出来る。

平常私共は、物を見たり、物を考えたりするのに、どうしても自分の立場、自分の心構えです。知らず知らずにそうなる。前はよく商業根性といわれたが、今日では職業意識で人を見るといわれる。人を見たら泥棒と思うのも、その一つである。これでは本當のことは分らない。

山は青く水は流れて白けれど

そのままの色の色にぞありける

自然法爾である。花は紅、柳は綠。すべてのものはすべてありのままなる姿であるのである。鳥はあくまでも鳥であるのであつて、單なる詩、單なる繪ではその一面しか捕えることは出来ない。私共の平常の意識を捨てて虚心坦懷、拘らぬところになつてこそ、始めて眞實の生きた一羽の鳥全體をみることが出来るのである。

悟りのところとはこのように、こだわりのない、無心のところで

ある。すやすやと眠むる赤坊は神や佛にたとえられる。いかにも無心である。だが、根本は全く異つてゐる。赤坊の無心は自ら求めたものでもなく、悩み迷つた末に得たものでもない。逆に、これから迷い、悩む、心なのである。故にそこには何等の働きも出て来ない。悟りのところも、悟つた丈けでは何にもならぬ。むしろ生悟りといわれて嫌われる。それは「悟つたよう」ではあるが、眞の悟りではない。眞の悟りには必らず、それに伴う作用、即ち働きが出て来なければならぬ。

私共の心はこれを一軒の建物にたとえてみるならば、北側を塞いで、南の日を一杯にうけ、東と西に窓をつけてゐる。自分の心の向く方にだけ縁側をつけて日光を充分にとり入れ、そこから庭即ち世間を眺める。これが一般のところである。ところが悟りのところは南は無論のこと西も東も、すべてをとり払つてしまい、出来れば残つた柱さえ邪魔になるといつた建物である。従つて月が照れば座敷一杯にさす。北風が吹けばこれまたひゆうひゆうと吹き通る。春には香り豊かな東風も思うさま入る。その代り夏には暑い西日が指す物音も四圍から聞えて来る。庭の様子も四方すべてが眺められる。ありがたいことも辛いこともある。日が照れば暖い。北風が吹けば寒い。自然そのままを素直おに受けて、寒い日は寒く、暑い日には暑く、春は豊かにくらし、秋はりんれつと生きる。壁や戸のない家だから隣近所の出来事は何でもすぐに分る。風が吹いても倒れない。地震だといえはすぐに飛び出せる。自由自在である。どのようなことが起ろうとも直ちに應ずることが出来る。戸障子のある家ではさうは行かぬ。悟りの心も無心である故に、何でも受容れることが出来る。入つて来るものを邪魔したり歪めたりする自我がないか

ら、物事をありのままに、素直おに受けとることが出来る。ものの本當の姿がはつきりと分る。それ故に、それに應ずるに誤りが無い。當意即妙である。一を聞けば十を知ること出来る。

散れば咲き咲けば又散る春毎の

花の姿は如來常住

一休

花が咲き、そして散つて行く、ただそれだけの姿に佛教の眞髓をみることも出来る。また拘わるべき自分がない故速座にどのような態勢でもとのえられる。釋尊の説法は百人の人が聞けば百通りに色々に聞えたといわれる。智者にも、愚かな者にも、それぞれに眞實を伝えることが出来た。悟りの心は、一切を含んでゐる故に、それが色々に變つて聞かれるのである。水はその容れ物によつて姿を變える。このように、悟りのところもまた時に應じ處に従つてどのような姿をもとることが出来る。従つてどのような働きをもすることが出来る。融通無碍であり、自由自在である。

だが、悟りそのものは決して動かない。月がその影を宿すものによつてその形を變ずることはあつても、月そのものは決してそのまゝと輝きとを變へはしない。悟りのところも、その働きや形は時々刻々に變るであろうが、悟りのところそのものは絶対不變である。常におおらかであり、自由であり、美わしく輝いてゐる。

私共はうちに悟りのところを抱きつつも、日々の生活に悩み疲れてその閃めきを止めることも出来ず、早々として短い人生を送つてしまふ。まことに悲しむべきことではある。眞實に迷い、眞實に疑い、自分に捕われて反つて自分を殺すことなく、自分を離れて眞實の自分を生かす、ここに人間としての眞の生活が営まれ、佛への道が開かれるのである。(完)

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇春は馬車に乗つて、そんな小説があつたと思う。この言葉は古くさい馬車という文字にも係わらず仲々近代的な感覺、魅力を全體として感じさせる。明るい色彩、輕快な轍の音、心おどる様なラッパの音、晴れた空、青い雲、溫い風そんな風景を心に浮かばせる。春は馬車に乗つて、今年も訪れる。

◇だが、現實に、日本の春は、こゝも快く明るく溫く訪れて来るかしら。毎日の新聞には餘りにも、犯罪記事が多すぎる。社會を走る馬車、講和への道をゆく馬車、どれを考へても、何か傷められ、どこかがガタビシとし、冷い隙間風を感じる。戦塵に汚れたためられた車だ。仕方がない。と言つてはすまされない。

◇こうしたことを考える時、遠い昔のことではなく、尙ほ現實に人々の腦裡に生きている「颯田本眞尼」をふかく追慕せざるを得ない。

い。誰でもが本眞尼になれるとは思えないが、老尼の人生への歩みの、ほんの一步を、私たち自らのものと出来たなら、この世の中はもつと溫かく明るくなるだろう。

◇人々の溫い心の寄り合い、そこに「楽しい浄土」が現われる。むつかしいことではない。誰もが、いま一步を、生活の上で、内心に翻えすことである。信仰は、この一步の歩みの翻りである。地方に住む人たちの清らかな、楽しく明るい信仰の生活を私は尊ぶ。

◇人生への「切なる願い」も「信ずる心」に裏づけられるとき、「厭な想い出」も淨められ、「月影」に照らされる。今月の本誌は、こうした意味で、いろいろと讀者の方々に共鳴いただけたと思います。

◇大野博士、竹中信常君、ともに佛教放送の要旨ですが、今月で完結、來月から佐藤賢順先生の、現代生活に對する新佛教道德を連載いたします。新しい現代戒律運動の一環として、佛教放送で多くの反響を受けたものです。

◇用紙の入手困難という事情にぶつかつて先月號の發刊が遅れたことをお詫びします。しかし幸い之道が開けました。「浄土」をのせた車の歩みは順調です。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。着次第御送本申上げます。

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年三月廿五日印刷
昭和廿六年四月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノ十
印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

新刊浄土トラクト

現代社會の混迷の中に、信仰を求める人々のために筆者がそれぞれ想を新たに、その道の一步をはつきり示した好著・本文各一六頁別表紙

信仰の導き

佐藤賢順著

一枚起請文

藤井實應著

本宗信仰の精粹、一枚起請文の永遠の生命は、いま身近かに語られた、必讀の書

◆各冊とも定價一部七圓送料六圓（切手代用可）

◆十部以上送料十二圓、十部を増す毎に六圓増、五十部以上三十五圓、百部以上は送料當方負擔

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話

藤田寛雅著

賣切

お彼岸の話

竹中信常著

賣切

お盆とおせがき

佐藤密雄著 四圓送料六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番